

# 特別支援学校の教育実習における 学生の意識について (3)

— 教育実習生へのアンケート調査から —

今野 邦彦<sup>1</sup> 池田 浩明<sup>2</sup> 小川 透<sup>3</sup>

## Awareness of trainees in regard to teaching practice at schools for special needs education (3)

— Findings based on questionnaire surveys completed by teacher trainees —

Kunihiko KONNO<sup>1</sup>, Hiroaki IKEDA<sup>2</sup>, Toru OGAWA<sup>3</sup>

### Abstract

This research, consisting of a summary of questionnaire surveys completed by trainees involved in teaching practice at special needs schools, is the third report followed by those published in 2011 and 2013. The questionnaire form used for this survey was improved to further clarify the awareness of and challenges faced by the trainees involved.

The surveys reveal that the trainees derived great satisfaction from teaching practice, identifying communication and interaction with children as the prime reasons.

### 1 はじめに

藤女子大学人間生活学部保育学科（以下、本学科とする）では幼稚園教諭免許状、保育士資格の他に、選択により特別支援学校教諭免許状を取得することができる。この特別支援学校教諭免許状取得のためには、特別支援学校での教育実習を履修する必要がある。特に本学科の学生の場合は、小学校以上の校種の免許状ではなく幼稚園教諭免許状を基礎免許として特別支援学校教諭免許状を取得することが特徴となっている。

特別支援学校の幼稚部の設置数、また幼児数は非常に少なく、当然幼稚部での教育実習学生受け

入れ数はごくわずかである。本学科の学生の中でも、幼稚部で教育実習を行える学生は限られている。すなわち大多数の学生は、小学部以上の学部で教育実習を行っているのである。

特別支援学校での教育実習についての研究は、これまでにも是枝ら(2007)、坂田ら(2007)によって行われてきた。しかしこれらの研究の対象になった学生は、本学科の学生とは異なり小学校以上の校種で教育実習を経験した学生である。

一方、池田・小川・武石(2011、2013)は、本学科の学生のうち特別支援学校での教育実習を履修した学生を対象に調査を行い、学生の意識、実習校・指導教員、大学に対する意見・要望等を明

所属:

<sup>1</sup> 藤女子大学人間生活学部保育学科

<sup>2</sup> 藤女子大学人間生活学部保育学科非常勤講師

<sup>3</sup> 藤女子大学人間生活学部保育学科非常勤講師

<sup>1-2-3</sup> Department of Early Childhood Care and Education, Faculty of Human Life Sciences, Fuji Women's University

らかにした。そこでは、多くの学生が不安と期待を感じながら実習に臨んでいるが実習後には高い満足感を得ていること、また自由記述では「子どもとの関わり」に関する回答が多いことなどが明らかにされた。また、事前指導で必要となる内容や、ボランティア体験の必要性についても示唆された。

## 2 目的

そこで本研究では、池田らの調査の項目を改変するとともに、新たな項目も加えて充実させ、本学科学生の特別支援学校教育実習の事前・事後における学生の意識をより明らかにするとともに、本学科における教育実習の充実に向けた体制整備などに関する課題について考察することを目的とする。

## 3 方法

本学科で、2014年度と2015年度に特別支援学校での教育実習を履修した学生（2014年度64名、2015年度54名、計118名）に対し、アンケート調査を実施した。調査は各学年とも2回に分けて実施した。

まず実習前の全体事前指導の時間に、実習前の期待、不安、教育実習における努力目標についての調査を行った。実習後については、それぞれの学生の実習終了時に、実習中に楽しかったこと・辛かったこと、実習の満足度、自己の成長、実習前のボランティア、実習校・大学への要望、後輩に伝えたいこと等について調査した。回答にあたっては選択技法（五件法及び多肢選択法）と自由記述法を併用した。

多肢選択法では、池田ら（2013）の研究を参考に選択肢を設定し、該当する3項目以内を選択する方法を採り、延べ回答数に対する割合を求めた。さらに自由記述の回答を参照することにより、学生の意識の詳細を提示した。

調査の結果115名から回答があり、回答率は97.5%であった。

## 4 結果

### (1) 実習前調査

#### ① 実習への期待度

実習への期待は、図1のとおり、「かなり期待がある」「少し期待がある」の合計が90%以上であり、教育実習への期待度の高さがうかがわれた。

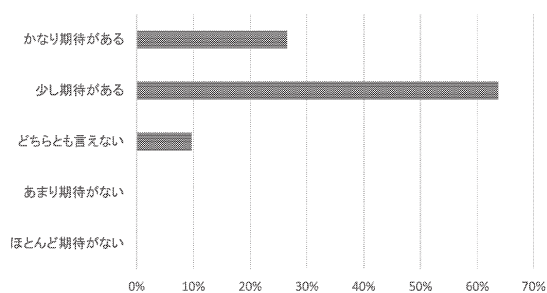


図1 実習への期待度

#### ② 期待の主たる内容

前問に関わって、期待する理由・内容を示したのが図2である。

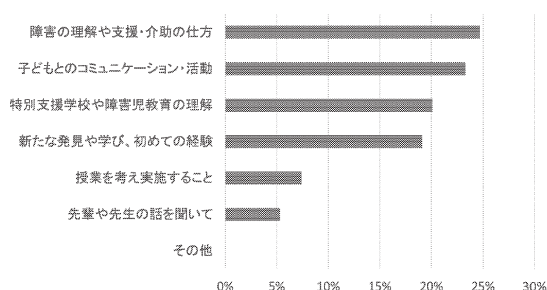


図2 期待の主たる内容

この結果から、学生はこれまでの大学での授業から発展して、学校現場で直接子どもたちと関わることによって得られる学びに対して、特に強い期待感を持っていることが示唆される。

自由記述からは、「先輩の話聞いて、大変だけどとてもやりがいのある実習だと感じた」「今までボランティアや他の実習で少ししか関わらなかったのが、長期間関わることで見えてくるものがあるのではないか」といった期待感や、「幼稚園や保育所とは違う体験を通して自分の成長につながると思う」「障害のある乳幼児の保育に活かしたい」といった本学科ならではの期待の内容も挙げられていた。

### ③ 実習への不安度

実習に対する不安については、図3のとおり、ほぼ全員が不安を感じていることがわかった。

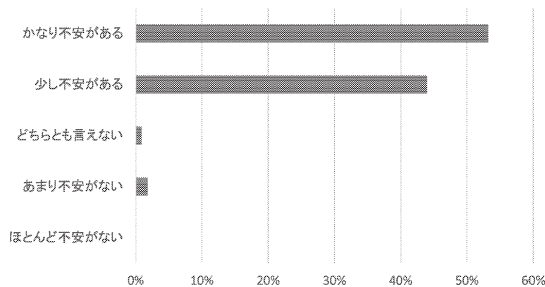


図3 実習への不安度

これは前述の池田らの研究においてもほぼ同様の結果が示されていた。

### ④ 不安の主たる内容

前問に関わって、不安の理由・内容を示したのが図4である。

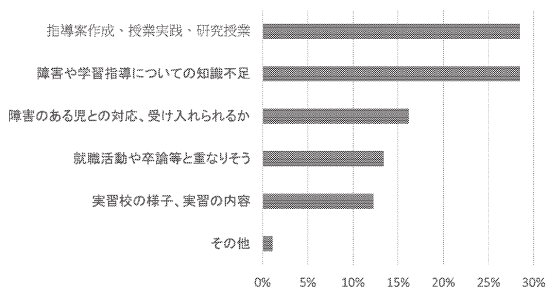


図4 不安の主たる内容

この結果から、実習の不安材料は授業・学習指導に関連した内容が中心であることがわかる。

さらに自由記述では「障害のある子とあまり関わったことがない」「今までの経験より高度なことが求められる」というものから「馴染みのない土地での実習のため」「保育所実習や卒業論文、就職活動と全てをこなせるかどうか不安」という特別支援学校の実習に特有、また4年生での実習に特有の理由を挙げる例も見られた。

### ⑤ 教育実習の努力目標

この項目は以前の調査にはなかったものであり、実習前にできるだけ具体的なイメージを持ち、実習への意欲を高めるといふねらいを持って設定した質問である。

結果は図5の通りで、実習前の学生が目標とし

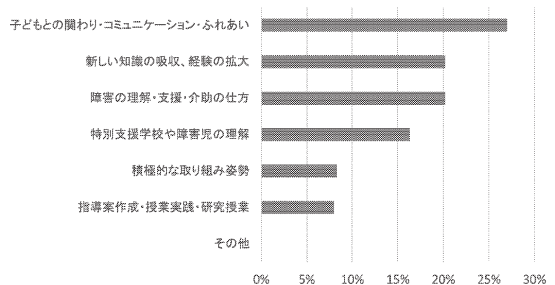


図5 教育実習の努力目標

て挙げている項目は「子どもとの関わり・コミュニケーション・ふれあい」「新しい知識の吸収や経験の拡大」「障害の理解や支援・介助の仕方」の順に多かった。一方、「指導案作成・授業実践・研究授業」「積極的な取り組み姿勢」は低い数値となった。

### (2) 実習後調査

#### ⑥ 実習中、楽しかったこと

楽しかったことについては「子どもとのコミュニケーション・ふれあい」が35.5%と最も多く、以下、「子どもとの様々な活動」「授業づくりの工夫、子どもの反応」と続き、やはり実習校の児童生徒との交流に関わる項目が上位を占めた。

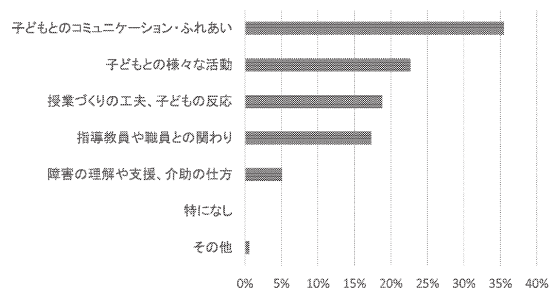


図6 実習中、楽しかったこと

自由記述では「一人ひとりの子どもに合った支援を考えることがとても難しく、同時に楽しかった」という特別支援の本質にかかわる回答や、「先生方の子どもに対する考えや対応に、感動することばかりだった」と、教員から学ぶことの大きさを指摘する回答も見られた。

#### ⑦ 実習中、辛かったこと

辛かったことは「指導案作成、実態把握、目標設定」の28.1%を筆頭に、「授業実践、研究授業、

教材作り」「自分自身の勉強不足、力量不足」の順であり、授業・学習指導を行う上での力量に関する項目が多かった。

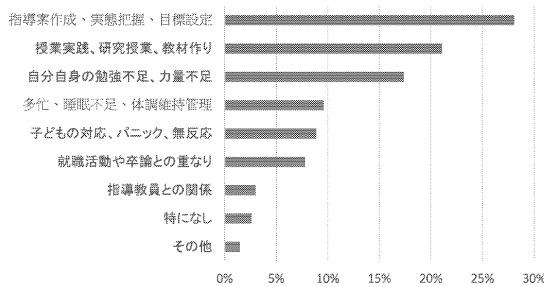


図7 実習中、辛かったこと

そのほかでは自由記述から「通勤が大変だった」「実習と公務員試験が重なった」「体調を崩した」など様々な困難に直面したことが窺われた。

### ⑧ 実習の満足度

実習前の「期待」を踏まえた、実習終了後の満足度についての質問である。結果は図8のとおり、「かなり満足した」「少し満足した」が計95.6%を占めた。

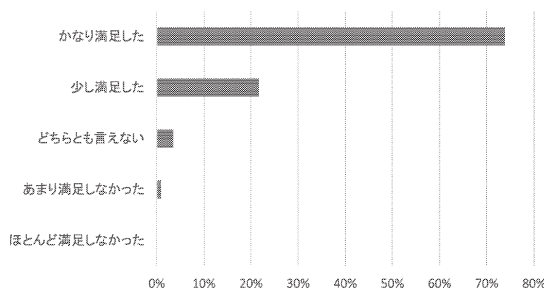


図8 実習の満足度

### ⑨ 満足の内容

前問に関連して、満足した理由を質問したところ、「子どもとのコミュニケーションやふれあい、交流」「新しい知識の吸収や経験の拡大」という項目が上位を占めた。

自由記述からは「授業の回数を重ねるごとに手応えを感じた」「授業をする側に立ってみて、学ぶことが多かった」「どのような授業をしたら生徒たちが楽しく学んでくれるのか、どんな反応をするのかを予想するのが楽しかった」「子どもたちのことを思いながら、教材教具を考えることができた」「自分が頑張った分、子どもたちが返してくれた」

「生徒が『先生、教えるのが上手になったね』と言われた」など、具体的なエピソードが示された。

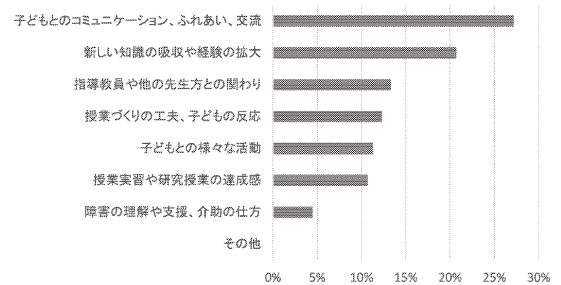


図9 満足の内容

### ⑩ 自分が成長したこと

実習前の「決意・抱負」「努力目標」を踏まえて、「自分が成長したと思うこと」について質問した。結果は「指導方法やアイデアなどを考え工夫する力」「障害の理解、障害のある児の見方」がほぼ同数であり、「指導姿勢、教育者としての意識」「実態を把握する力」「子どもとのコミュニケーションやふれあい、交流」が続いた。

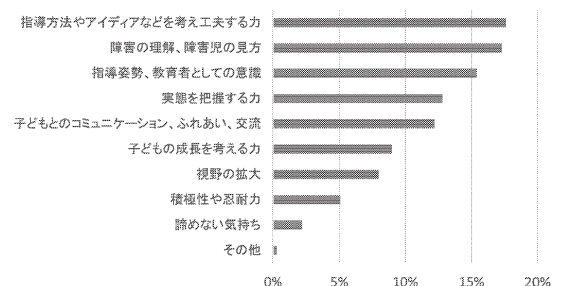


図10 自分が成長したこと

### ⑪ ボランティアの有効性

本学科では、教育実習を履修するにあたって、特別支援学校等でのボランティア活動を課してい

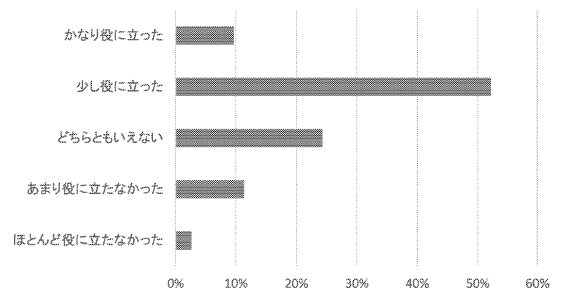


図11 ボランティアの有効性



るが、これについて「役に立ったかどうか」を質問した。結果は「少し役に立った」が52.2%、「どちらともいえない」が24.3%、「あまり役に立たなかった」が11.3%であり、「かなり役に立った」は9.6%にとどまり、さらに「ほとんど役に立たなかった」という回答が2.6%あった。

#### ⑫ ボランティアが役に立った理由

まずボランティアが役に立ったと考える回答者が挙げた理由は、「障害のある子どもと関わる経験ができた」が26.1%であり、以下「障害のある子どもの理解や接し方を知ることができた」「特別支援教育のイメージづくりができた」「特別支援学校の教職員や雰囲気を知ることができた」というものであった。

自由記述では「(実習校へ事前にボランティアに行ったので)生徒に顔を覚えてもらっていた」「ボランティアで経験していたので、車いすの生徒への対応がスムーズにできた」という回答があった。

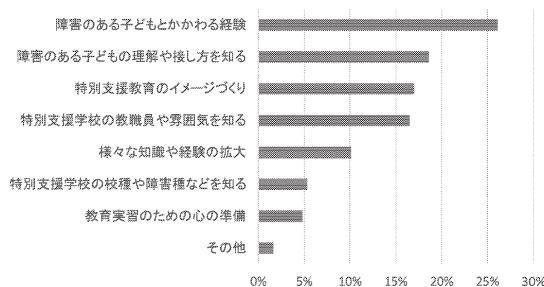


図12 ボランティアが役に立った理由

#### ⑬ ボランティアが役に立たなかった理由

一方、ボランティアが役に立たなかったと考える回答者が挙げた理由は、「ボランティアと教育実習では内容が大きく異なる」「ボランティアに行った学校と、校種や障害種が違った」「行事等の手伝いが主で子どもと関わる機会がなかった」という

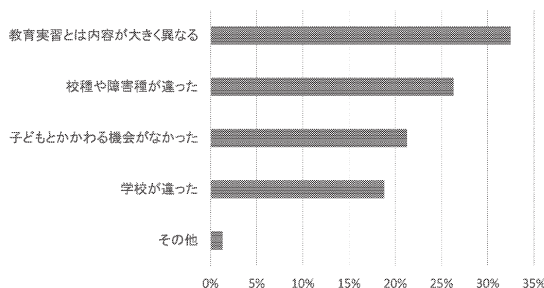


図13 ボランティアが役に立たなかった理由

順であった。

自由記述では、「肢体不自由と知的障害では内容が違う」「1日だけのボランティアでは学べるものが少ないし、子どものこともよくわからずに終わる」「子どもと関わる機会が少ないと、あまり役に立たない」といった指摘があった。

#### ⑭ 実習校への要望

教育実習校や指導教員への意見・要望を自由記述で求めた。

「熱心に指導していただき、感謝している」「丁寧に指導助言していただき、得るものが多かった」という肯定的な回答が大多数を占めていたが、一部には「教員によって対応が違った」「次の日の動きなどの見通しを示してもらいたかった」、また「印刷機が使えなかった」「控室が寒かった」「実習生だけ給食がなく、毎日弁当を作るのが大変だった」「通勤が大変だった」というものもあった。

#### ⑮ 大学への要望

大学での事前指導・講義・演習等についての意見・要望を自由記述で求めた。

「大学での講義・事前指導が役立った」という回答は少数意見であり、「事前指導で学習指導案の書き方をもっと詳しく教えてほしい。幼稚園の指導案とは様式が異なる」「実習日誌の書き方の指導をもっとしてほしい」「演習等で、模擬授業をする時間を設けてほしい」といった要望が多数見られた。

#### ⑯ 後輩に伝えたいこと

教育実習全般を振り返って、後輩に伝えたいことを自由記述で求めた。多数の記述があったが、一部を抜粋する。

「特別支援学校で実習をすることによって、世の中には本当に色々な子どもたちがいるということが分かり、視野が広がる。それは保育の道に進むうえでとても大切なことだと感じる。ぜひ実習を選択してほしい。」「特別支援学校で働くか働かないかに関係なく、障害について理解を深めるためにも経験すべき実習であると思う。」「授業をするというのは、難しく戸惑うこともあると思うけれど、やって良かったと思える実習」「障害が色々あるので、関わり方などを、どんどん先生に聞いて、積極的に関わって、理解を深めてほしい。そうしたら、より充実すると思う。」「幼稚園や保育所とは実習の仕方が異なり、戸惑うこともあると思うが、恐れずに積極的に取り組んでほしい。それが一番の経験になると思う」

## 5 考察

今回の調査項目や選択肢の内容は、池田ら(2013)の研究結果(以下、前回調査とする)を参考に改変したものであり、完全に一致するものではないが、比較検討の材料とする。

実習への期待度は、「かなり期待がある」と「少し期待がある」の合計が90%を超えており高率であった。前回調査では75~80%程度であった。これは前回調査の結果を、大学の授業や教育実習事前指導の中で学生にフィードバックしてきたことにより、教育実習の内容の理解が進んだことが重要な要素であると考えられる。

期待の内容・理由については前回調査と項目が異なるが、「子どもとのコミュニケーション・活動」に関わる項目が上位になっており、本学科の学生の期待は、特別支援学校の子どもたちとの関わりが大きな位置を占めていることが分かる。

実習への不安度は、「かなり不安がある」「少し不安がある」を合わせると97%以上であり、ほぼ全員が不安を抱えていることがわかる。先述の期待度の高さと相反する結果とも考えられるが、不安の内容・理由として「指導案作成・授業実践・研究授業」「障害や学習指導についての知識不足」が多数を占めていることから、学習指導に関わるものが不安材料であることが明らかである。これは本学科の学生が、小学校以上の教科指導について学ぶ機会がないまま特別支援学校の小学部・中学部・高等部に実習に行く例がほとんどであるため、必然的な結果ともいえる。

教育実習での努力目標は今回の調査から導入した質問だが、最も多かった回答は「子どもとの関わり・コミュニケーション・ふれあい」であり、最も少ないのは「指導案作成・授業実践・研究授業」であった。このことから、本学科の学生は自分たちの得意分野である子どもたちとの関わりをさらに磨くことによって、特別支援学校での教育実習を充実させようとしていることが窺われる。

実習後の質問項目について、楽しかったことでは「子どもとのコミュニケーション・ふれあい」が35%以上を占め、次も「子どもとの様々な活動」であることから、やはり子どもとの関わりがポイントになっていることがわかる。

辛かったことは「指導案作成・授業実践・研究授業」「授業実践・研究授業・教材作り」「自分自

身の勉強不足・力量不足」の3項目で全回答数の67%を占めており、ここでも授業関連の内容が学生にとって試練になっていたことがわかる。

実習の満足度の質問に対しては、4人に3人が「かなり満足した」と答えており、苦労をしながらも最終的には満足感を得られたことが示されている。

満足の内容・理由は、前回調査と同じく「子どもとのコミュニケーション・ふれあい」「新しい知識の吸収や経験の拡大」の順で多かった。このことから、学生にとっては、学校現場での知識・経験の拡大が、実習の満足感につながる重要な要素であるということがいえる。

「自分が成長したと思うこと」という質問に対しては、図10のとおり、多数の項目が回答として挙げられた。これは学生個々の課題に対しての実感であるため、その回答内容も分散したと考えられるが、今回も前回調査でも、「指導方法」に関する項目は上位に位置づいていることから、具体的指導方法については教育実習を通じて成長した実感が得られる場合が多いと推測される。

ボランティアの有効性についての質問では、前回調査では4件法で最も上位にあたる「役に立った」が最多回答であったが、今回は5件法の二番目である「少し役に立った」が半数以上を占めた。また「どちらともいえない」「あまり役に立たなかった」「ほとんど役に立たなかった」の合計が学生の4割近くを占めるという結果になった。

ボランティアが役に立ったと考える理由は図12のとおり様々である。一方ボランティアが役に立たなかったと考える理由については、図13と先述の自由記述の内容から、学生は教育実習校と同じ学校にボランティアに行きたくてじっくり子どもと関わることを望んでいるが、現実はそのではないことから、ボランティアの有用感が薄れているものと考えられる。

実習校への要望は数的には少ないが、対応についての要望も見られた。しかし内容的には学生側の努力で対応できるものも多く、大学での事前指導の際に詳しく指導をすることで納得が得られることも多いと考えられる。

これに対し、大学への要望は数も内容も多かったが、特に「指導案作成」と「研究授業」が多数を占めた。先述のとおり、本学科の学生のほとんどは、教科指導法について学ぶ経験がないまま小

学部以上の学部で教育実習を行っているため、授業の計画・実践、そして幼稚園実習とは様式が異なる指導案の作成に戸惑いがあり、このような結果になったと考えられる。大学としては、現在のカリキュラム内では限界があるものの、より実践的な授業や指導案についての指導を充実させることで、教育実習をより有意義なものにする必要がある。

最後に「後輩に伝えたいこと」では、先述のとおり、教育実習の意義が数多く語られている。教育実習を履修した学生は、必ず報告書と指導案を後輩に残すことになっているが、このような生きたメッセージが次年度の教育実習生の力になることが多いと考えられる。そのため、教育実習事後指導の際に、次年度の実習生も参加して、直接話を聞くなどの方法が有効であると考えられる。

教育実習生の意識に関する研究は以前から行われており、最近も、久保(2012)、麓(2013)、仲矢ら(2015)、佐藤(2016)、松宮(2016)などが、教育実習をめぐる学生の意識の変化・形成について考察している。このうち仲矢らは、教育学部小学校コース・中学校コースの学生を対象に教育実習に関する意識調査を実施し、「実習生の実習に対する不安は全体的に高く、特に授業に関する不安が高いが、指導教員や実習生との関係に関しての不安は低いこと」「実習の充実度が高いこと」などを明らかにした。これは今回調査と共通するものであり、いかなる専攻の学生であっても授業に対する不安は大きいということが示唆される。また様々な経緯の違いがあっても、最終的には実習の満足度は高く、学生にとって非常に有意義な経験であることが確認された。

本学科の調査では、事前のボランティア活動について課題が浮き彫りにされた。これについては中教審(2015)が、「インターシップは、学生が長期間にわたり継続的に学校現場等で体験的な活動を行うことで、学校現場をより深く知ることができ、既存の教育実習と相まって、理論と実践の往還による実践的指導力の基礎の育成に有効である。また、学生がこれからの教員に求められる資質を理解し、自らの教員としての適格性を把握するための機会としても有意義である」と提言

しているように、学校インターシップの導入も有効な手段のひとつであろう。導入にあたっては「教育委員会や学校と大学との連携体制の構築、大学による学生に対する事前及び事後の指導の適切な実施、学生側と受入れ校側のニーズを把握するための情報提供の実施など、環境整備について今後十分に検討することが必要」とされており、さらに「学校インターシップについて、教職課程において単位化することや教職課程コアカリキュラムに盛り込むこと」も提言されている。

このようなことを踏まえ、本学でもボランティア活動の単位化など、教育実習前後の指導をより充実させることにより、学生が不安を軽減し、自信を持って教育実習に臨めるものとする。

## 文献

- 中央教育審議会(2015)「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について」(中間まとめ)  
麓信義(2013)「小学校教員養成における教育実習の役割：教科に対する意識の変化に注目して」弘前大学教育学部紀要, 110, 63-80.
- 池田浩明・小川透・武石詔吾(2011)「特別支援学校の教育実習における学生の意識について(1)——実習生の期待・不安・成長に関するアンケート調査から——」藤女子大学紀要第Ⅱ部第48号, 125-131.
- 池田浩明・小川透・武石詔吾(2013)「特別支援学校の教育実習における学生の意識について(2)——期待・不安及び意見・要望に関するアンケート調査から——」藤女子大学人間生活学部紀要第50号, 95-102.
- 久保順也(2012)「初等教育教員養成課程における学生の教職意識の形成プロセスに関する縦断的研究(4)」宮城教育大学紀要 47, 295-305.
- 松宮信吾(2016)「教職課程認定大学における教育実習の実施効果の検証に関する研究——関西外国語大学の事例を中心として——」関西外国語大学研究論集, 103, 119-135.
- 仲矢明孝・三島知剛・高旗浩志・稲田修一・後藤大輔(2015)「3年次教育実習に関する学生の意識の検討——平成25年度受講生アンケートの結果から——」岡山大学教師教育開発センター紀要, 5, 別冊.
- 佐藤慶子・阿部敬信(2016)「幼稚園教育実習で学生が感じる困難に関する研究——幼稚園教育実習事後及び事前の自己評価アンケートの分析から——」別府大学短期大学紀要, 35, 17-26.